

## 令和元年度 東京都公民館連絡協議会 職員部会研修会議事録

日時：令和元年 9 月 1 8 日

1 4 時～1 6 時

場所：日野市中央公民館

講師：岩松 真紀さん

本研修には、職員部会の委員を含め 3 2 名の参加のもと、活発な意見交換が交わされた。非加盟の東村山市、府中市から各 1 名、調布市から 2 名、参加いただけただけということも、大きな成果であった。以下、本研修についての報告を行う。

**開会**

司会（西東京市田無公民館・山本さん）

資料の確認、職員部会研修の説明など

**事例発表**

事例発表 1（国分寺市立恋ヶ窪公民館・増本さん）

**【こいがくぼ国際教室について】**

- 経緯①ジュニアサロン公民館学習支援事業。平成 2 7 年度より実施。3 0 年度までの 4 ヶ年計 1 7 8 人の小学生が受講
- 経緯②③H 2 9 ・ 3 0 年度多文化共生講座
- 日本語を勉強中の小中学生に無料で学習支援。学校からの手紙などを読みたい保護者も子どもと一緒に参加可能
- 絵手紙や太極拳など他団体との交流も行っている
- 現状：受講者とボランティアスタッフとのマッチングや庁内調整・連携、団体交流など
- 課題：講座の周知方法、社会教育における外国人支援の在り方
- 担当の思い
  - ① 本講座を必要としている子どもたちに、学びの情報がもれなく行き届くこと
  - ② 受講した子どもたちが、学校生活で日本語に不自由なく、かつ地域の中でいきいきと活動すること
  - ③ 受講している子どもたちを介して、団体間の交流が生まれ、利用者の喜びややりがい、地域の活性化に寄与する

- 国際協会の思い
  - ① 「子どもの居場所」としての講座の定着
  - ② ボランティアスタッフの要請
  - ③ 教材の安定確保

事例発表 2 (福生市公民館松林分館・松浦さん)

【松林喫茶コーナーについて】

- 松林分館に入してすぐ、セルフの喫茶コーナーがある
- 1杯10円。セルフでお湯を注いで利用。セルフでお湯を注いで利用できる。
- メニュー はコーヒー・紅茶・緑茶・ほうじ茶・玄米茶
- 喫茶コーナーは、利用者交流会をはじめ、サークル活動の休憩時間や松林分館に立ち寄られた地域の方、子どもなど、様々な方に利用されていえる。
- 利用者交流会
  - ⇒公民館登録サークルによる利用者主体の交流会。公民館各に存在（松林分館利用者交流会、白梅分館利用者交流会、本館用者連絡会）
- 松林分館は偶数月第一土曜日開催
  - ⇒会議内容 …サークルの交流・所属サークル活動の宣伝・イベントに向けた会議・交流主催研修の企画等々
- サークル活動での利用に限らず、地域方々にも利用して頂くことで、地域のコミュニケーションを繋ぐ要素になるよう努めている。

～職員のサポート～

- ⇒交流会計から予算を預り、各種お茶・コーヒー等を購入・用意
- ⇒毎日のお湯の用意や窓口での紙コップとの引き換え

～「松林喫茶コーナー」の存在意義～

- 公民館の“居場所作り”の大切なツール
  - ⇒公民館に立ち寄るきっかけとして
- 時間・空の共有
  - ⇒人との繋がり作りとして
  - ⇒地域の情報を交換する場として
- 成果として …年3回発行している「松林分館だより」の近隣への配布協力に繋がることも

～「松林喫茶コーナー」における職員の役割①～

- 職員にできることは、お茶等の提供のお手伝いだけではない
- ◎「喫茶コーナー」が「地域のコミュニティを繋ぐひとつの形であること」「誰もが気軽に立ち寄ることができる地域の居場所であること」を正しく伝えていく。  
(ただのサービスではなく、交流空間・居場所作りのツールであること)
- ◎職員もこの“居場所”に積極的に関わりを持ち、松林分館で「人と人とを繋げる」方法を一緒に考えていく必要がある。

～「松林喫茶コーナー」における職員の役割②～

- 「人と人とを繋げる」ために…  
⇒職員も松林分館に来館してくれる方々と積極的に関わる
- 世間話をする事から、相談事を聞くこと、事業の意見を伺うこと…等
- 「喫茶コーナー」があるから、溜まり場として集まる人とコミュニケーションを取ることができる
- 市民同士も、市民と職員間でも、色々な意見を共有できる  
⇒公民館のロビーで集う「喫茶コーナー」だからこそ、
- 集う方々、多数の視点からの課題等が分かる
- …需要を知り、講座を立ち上げるきっかけを得る

## **グループワーク**

全部で6つのグループに分かれワールド・カフェ方式でグループワークを行った。グループワークでは、イスのみでテーブルは使わず、ダンボールでできた円形の板「えんたくん」をグループメンバー全員の手で支えテーブル兼メモ用紙代わりとした。今回は時間が限られていたため、グループ替えは1回のみとした。1回目のグループでは、自分の名前、事例発表の感想、仕事で大切にしている事を自分に近い余白から順に書き、それを一人ずつ話していった。1周したあとは、事例発表の実践の先に何が考えられるかについて自由に話し合った。その際、思いついたことを余白にメモしていった。2回目のグループでは、席の移動をしなかったリーダー役が、前回のグループで出た話の内容を発表し、それを踏まえてさらに話し合いを行った。

### **各グループの発表**

#### **【1 グループ】**

前半では、必要な人に必要な情報をどうやって伝えるか、広報の仕方の重要性、公民館利用者の高齢化・固定化、いかに若い人を呼び込みいい流れを作るか、などについての意見が出た。後半の部分では、それぞれの市で違いがあり、同列とはいかないといった意見や、目的を持った居場所づくり、アンテナを張ることなどのキーワードのほかに、フリースペースの工夫が必要なのではとの意見も出た。

#### **【2 グループ】**

1回目の話し合いでは、居場所について公民館でどう考えているのかについての話題で盛り上がった。各市によって状況が違うが、施設のハード面をうまく利用したり、地域の空き家やそのほかの施設をうまく使うといった例が見受けられた。また、利用者団体の在り方についても話し合った。2回目では、事例発表であった松林分館のことについて（福生市さんがいたので）詳しく話を聞いた。職員の対応の努力と市民の努力が一緒になり、公民館に人を呼び集め、集まった人たちがサークルに興味を持ち、サークルに入ってリピーターになる、といったサイクルが出来上がっている。これをいくつも作ることで、地域全体がいきいきとするのではないかと。

#### **【3 グループ】**

1回目では、国分寺市さんの発表を聞いて、なぜ参加者が2名でも講座を開催することができたのか疑問が上がった。2回目で国分寺市の方と同じグループになったため本人に聞いたところ、担当者の思いと、上からのやろうという思いの両方があったためだと言われ、素晴らしいと感じた。その時に自分たちの意識が変わることが公民館を変えていくことになるのではないかと話になった。

#### **【4 グループ】**

グループメンバーの、公民館をよくしたいという意識が非常に高かった。そして、利用者さんとの繋がりや、居場所づくりを皆さん一生懸命考えている。ただ、社会教育として

何をしているのかが公民館として伝わっていない。広報が下手であるという意見が出た。これらをどうしていくのかが今後の課題。

#### 【5 グループ】

1回目では、事例発表をしていただいた国分寺市の増本さんのお話の中にも出てきた野中さんがグループ内にいた。そこで、国分寺市の講座参加者と職員と一緒に講座の内容を考える準備会の話になった。2回目では、この話をもとに市民が講座を企画するかという話になった。小金井市さんでは企画実行委員会というような市民参加があるという話になった。

#### 【6 グループ】

1回目では、10円カフェの話から居場所づくりや、各公民館でどのように市民の方に居場所提供をしているかといった話になった。また、国際交流の事例の話にもなり、市によって特色が違うので他市のいい企画をどう受け入れていくかという話になった。そのまま採用しても、その市民には合わなかったりするのでどうすればいいのかまで話して1回目が終わった。2回目も市の特色について話した。小平市には11館も公民館があり、同じ市内でも公民館ごとに特色が違う。ニーズや新しい人の参加をどうしていくのか。利用者の方との繋がりと、ニーズを知ることが必要。

## 講評

### ■公民館だよりについて

千葉事例：市民が独立して編集して、そこに職員が入っていくというところがある。

そういうところでは、公民館のことだけでなく地域の新聞のように、地域の事柄を編集するような内容を作っているところがある。

それが積み重なるとどうなるかという、地域の記録を公民館だよりが担うこととなる。周年史などをだすときにそのときに何があったかが解り、貴重な記録となる。講座内容だけでなく地域の事柄も内容にするとよい。

こうみんかんだよりは、公民館へ来ない人への情報提供であり、社会教育として学習したものの成果発表になる。

### ■社会教育をめぐる変化と課題

施設使用の有料化、施設運営管理の民営化、施設の非教育機関化、職員の非正規職化、職員養成と専門性等の問題がある。

### ■何のために公民館があるのか

#### ・生活課題を学習課題に

いま一度、専門職として何のために公民館があるのか、いろいろな人の抱える生活課題をとらえ、どのような学習課題にしていくのかが職員の専門性が発揮されるべきところである。

#### ・課題を自ら見つけている人を育てる。

市民は自分の困っていることが、どんな学習課題につながるのかは知らない方が多い。将来的には課題を自ら見つけていける人を育てて欲しい。

やってあげるのではなくて、それを考えていける人を地域に育てて欲しい。

思考や判断を作っていくのが皆さんの仕事。やってあげる支援してあげるではなく、地域に考える人を作ってあげるのが仕事である。

考える人が増えると、その問題を理解する人も増え、さらに考える人も増える、それをどう巻き込んでいくのかというのを頭の中に入れて考えていっていただきたい。

### ■「地域にある公民館から地域に根ざす公民館へ ～福生市公民館松林分館 加藤有幸～ (1996年社会教育推進全国協議会「日本の社会教育実践」)」より

なぜ今、松林分館でカフェがおこなわれているか、「松林分館では基本方針として「地域に開かれた公民館、下駄履きで来れる公民館を目指す」ことを大事にしてきた」としている。

それが今の松林館でカフェが行われていることに繋がっているのだと考えている。

そして、「施設が開放的であるばかりではなく、人々が日常の生活課題を気軽に持ち込み、相談できる雰囲気と場が必要なのだ。」と記されている。この思いが今に繋がっているのではないかと思う。

また、「松林分館では識字学級は10年になる（1996年時点）～その識字学級で習った人が、アパート代が2千円の値上げにより、アパート代が払えずに引っ越すことになった。彼女は最後に参加した識字教室で、「福祉事務所に引っ越しの理由書を11枚失敗したけれど、やっと書いて、届けることが出来た。ここの勉強のお陰だ。」と言って引っ越していった。彼女が文字を獲得することは生活を獲得することであり、子どもの成長を保障することである。」と記されている。上記のことは国分寺市の事例にあてはまるものであると思う。